

浄土真宗本願寺派高岡教区主催



全戦没者を悼み

平和を願うつどい 2007

テーマ 「承元じょうげんの法難ほうなん」に学ぶ

ごこくしそう きょうぎょうしんしょう
～護国思想と『教行信証』～



日時 8月6日(月) 午後6時30分～9時30分

会場 西本願寺高岡会館 (高岡市東上関446 TEL0766-22-0887)

第1部 [全戦没者追悼法要]

第2部 [平和を願うつどい]



講師 藤場 俊基氏 (真宗大谷派僧侶・石川県常讚寺衆徒)

入場整理券 一枚500円

「承元じょうげんの法難ほうなん」に学ぶ ～護国思想ごこくしそうと『教行信証きょうぎょうしんしょう』～

1994（平成6）年にはじめられた「全戦没者を悼み平和を願うつどい」も本年で14回目を迎えますが、本年はまた「承元の法難」が起こってから八百年目にも当たります。

「承元じょうげんの法難ほうなん」とは、1207（承元元）年2月、後鳥羽上皇を中心とした朝廷が、法然上人の専修念仏せんじゆねんぶつを禁止し、その教団に弾圧を加え、4人が死罪、8人が流罪となった事件です。この時、親鸞聖人は越後の国府（現在の新潟県上越市）へ、師匠の法然上人は土佐（実際には讃岐）へ流罪に処せられました。

そしてまた、この時の朝廷の弾圧には、法然上人の教えの広まりに危機感をいだいたそれまでの仏教勢力（京都比叡山や奈良興福寺）の念仏禁止の訴えが背後にありました。

そこには、大きく二つのことが主張されています。一つは戒律を守り学問修行をして悟りを開くのが仏教との立場から、ただ念仏を称えることによって救われるという教えへの批判です。もう一つは、祈願きがん、祈祷きとうを旨とし、天皇や貴族を守護する「護国」の立場から、すべての人々が平等に救われると説く専修念仏への批判でした。仏教は「朝廷という権威の下に従属すべきであり」、かつ「朝廷の支配秩序の維持に貢献してこそその働きがある」というのです。その点で専修念仏は「国土を乱る」の教えであるから禁止すべきだということになるのです。

親鸞聖人にとって、「承元じょうげんの法難ほうなん」は「仏法者を名のる者が仏法者に仇をなした」事件であり、「仏教とは何か」を終生問い続ける契機となる事件でもありました。

そして、この弾圧側の仏法者を名のる者こそが仏法を滅ぼす「獅子身中の虫」である、との批判が親鸞聖人のライフワーク『教行信証きょうぎょうしんしょう』執筆のテーマだと近年その著書で主張・論証したのが今回講師としてお招きする藤場俊基氏ふじぼとしきです。

親鸞聖人のお手紙に「世のなか安穩あんのんなれ」との言葉があります。この言葉はご門主の近著の題名に使われ、親鸞聖人750回大遠忌のスローガンにもなっています。「世のなか安穩あんのんなれ」と護国思想はどこがどう違うのでしょうか。八百年前に念仏教団を弾圧した護国思想は現代のヤスクニ思想と通底しているとの立場から、改めて念仏と「ヤスクニ」との関連を探っていきたいと思います。